

地域づくり表彰

しょうばらしたかの
庄原市高野地域づくり未来塾（広島県庄原市）

～中国やまなみ街道開通をインパクトとした～
農業と観光を活かした地域づくり

庄原市高野地域づくり未来塾

塾長
せお じろく
瀬尾 二六



1. 庄原市の概要

庄原市は、広島県の北東部に位置する人口約 38,000 人の地方都市で、平成 17 年 3 月に 1 市 6 町が合併して誕生しました。

この庄原市の最北端に位置する高野地域は島根県との県境に位置し、人口 1,919 人、高齢化率 45.5%の過疎の町であり、積雪量が 1m を越える豪雪地帯でもあります。

主要産業は農業で、稲作をはじめ、特にリンゴや大根は広島県内一の生産量を誇っています。そのほか、夏秋イチゴやトマト、アスパラガス、ほうれん草をはじめとした高原野菜が有名な地域でもあります。



高野へ通じる国道

2. 活動開始の背景・経緯

庄原市では、合併した旧市町がそれぞれの多様な資源を活用した地域づくりを進め、それを繋ぐことで、にぎわいと活力のあるまちを作るという「クラスターのまち実現プロジェクト」を実施することとなりました。

高野地域ではこのプロジェクトの内容を「中国横断自動車道開通に伴うわがまち活性化推進事業」に決定して事業を進めることとなりました。

このプロジェクトを進めていくための市民組織として生まれたのが「庄原市高野地域づくり未来塾」です。未来塾は高野町内で積極的に地域づくりに関わっている市民が中心となって平成 20 年 9 月に塾生 26 名で発足しました。

高野地域に通じる道路は主に 3 ル

ートがありますが、いずれも峠を越えなければなりません。また、冬期間は深い雪に閉ざされ、陸の孤島とも言われてきました。

こうした厳しい地理的条件の地域に高速道路が整備され、インターチェンジも設置されることに、誰もが大きな期待をかけて、組織はスタートしました。

3. 道の駅整備構想への参画

未来塾の発足と時を同じくして、庄原市では、高野インターチェンジ付近に「道の駅」を整備する計画が持ち上がりました。

そこで未来塾ではまず、魅力的な道の駅とするために、視察研修やワークショップの中で地域にマッチした、今からの道の駅の構想をまとめ、庄原市に提言していきました。

道の駅を整備するにあたって私たち未来塾が提案したコンセプトが「徹底的に地元産にこだわる」という考え方でした。

この提案は、道の駅のハード面では地元産の木材を使った駅舎の整備に繋がり、ソフト面では、地元で生産、加工したものにこだわり、販売するという道の駅の経営方針へと繋がりました。



道の駅たかの

道の駅は平成 25 年 4 月にオープンし、大変な活況を呈しています。特に初年度は、当初見込みの 2 倍以上となる 4 億 8 千万円の売り上げを達成し、売り上げが大きく落ち込むと言われ

る 2 年目も 4 億 6 千万円と好調な売り上げを継続しました。

3 年目となる今年は、尾道松江線（通称：中国やまなみ街道）の全線開通により、瀬戸内や四国方面からの来館者も増え、初年度を上回る売り上げを実現しています。

4. 高野の逸品 100 プロジェクト

高野地域は、前述したように農業が盛んな地域であり、専業農家も数多くあります。そのため、最盛期には多くの野菜や果物が出荷されますが、冬場や春先には出荷する農産物は何もない状況でした。

せっかく新しい道の駅が誕生しても、販売するものが何もないということでは、道の駅の評判にも影響してきます。

そこで、未来塾では通年を通じて販売ができ、特産品にもなる加工品の開発を「高野の逸品 100 プロジェクト」と銘打って、取り組むこととしました。

農業に携わる皆さんは、生産のプロではあっても、加工や販売といった面では素人です。また、一次産品を出荷すればそれなりの収入があり、面倒な加工まですることにはなかなか理解が得られませんでした。

それでも、プロのアドバイスや先進地の成功事例の研修などを重ねる中で、加工品の魅力を少しずつ理解してもらえるようになりました。特に、店頭には並ばない B 級品を加工に活かすことが、新たな収入源となることに加えて、農産物を無駄なく販売することが農家の生産意欲にも繋がっていきました。

逸品の開発 100 品目を目指して平成 23 年から始めたこの事業は平成 26 年度末には目標を達成し、105 品目の逸品を認証することができました。

また、加工品を製造・販売する新たな会社も設立され、雇用の場の確保にも繋がっています。

さらに、道の駅たかのでは逸品コーナーを設け、直売所の主力商品ともなっています。



「高野の逸品」カタログギフト

5. 着地型観光の推進

高速道路の開通と高野インターチェンジの開設は高野地域にとって、100年に1度の転機となる出来事です。しかし、何もしなければ高野はただの通過点に過ぎません。

高野インターから「道の駅たかの」を玄関口として、高野地域を訪れてもらうために、農業体験や自然体験、農村民泊に取り組むこととしました。

高野地域は西日本でも有数の豪雪地帯で「広島県の北海道」とも言われています。冬は最低気温がマイナス10度以下にもなり、積雪も1m以上となります。

この厳しい自然環境を逆手にとって「冬こそ高野」をキャッチフレーズに雪を使ったモニターツアーや体験メニューを提供してきました。

体験メニューとしては「スポーツ雪合戦体験」「スノーランタンづくり」「かまくら作り」「スノートレッキング」など都会では味わうことのできない体験が、子ども達にはとても新鮮で魅力的なものとなっています。



未来塾が始めたこの着地型観光の取り組みは、民泊農家や体験メニュー提供者が中心となって組織する「高野地域農村体験交流協議会（通称名：たかの遊☆学☆隊）」へと引き継がれ、積極的な誘致活動へと繋がっていきま

その結果、平成27年度には瀬戸内の中核都市である福山市の小学生53名を3泊4日で迎えることができ、これからも受入校を増やしていく予定となっています。

6. 鍋&漬物グランプリ

未来塾は、特産品開発と観光振興に取り組んできたことを報告してきましたが、その一環として開催してきたイベントを紹介したいと思います。それは、暖かい鍋と漬物の味を競う「鍋&漬物グランプリ in 雪合戦」です。

高野地域では、豪雪地帯の特色を活かして、平成9年から「広島県雪合戦大会」を開催してきました。この大会に併せて、平成23年からグランプリを開催しています。



鍋&漬物グランプリ in 雪合戦全景

高野地域は昔から「漬物がおいしい」といわれ、各農家では色々な漬物が作られてきました。しかし、自家用として漬けるため、商品として店頭で並ぶのはごく一部しかありませんでした。

この隠れた逸品を掘り起こして商品化することを目指すとともに、雪合戦で高野地域を訪れる選手や応援団に、地元の食材を使ったおいしい鍋料理を振舞うこととしました。

このグランプリを開催することにより、雪合戦大会の来場者は倍増し、広島県を代表する冬の一大イベントとなりました。

また、漬物を出品した農家では、商品化を思い立つ人が現れ、今では道の駅の看板商品ともなっています。



道の駅の漬物コーナー

7. 庄原市内全域への広がり

未来塾が始めた特産品開発や着地型観光は、高野地域をモデルとして、今では庄原市全域へと広がりを見せています。

高野の逸品事業は、庄原市の逸品事業へと引き継がれ、平成26年度末には加工品29品目、料理14品目が庄原市の逸品として認証されました。

また、着地型観光は庄原市観光協会が旅行業の登録を行い、受入れ窓口となって、市内全域を対象として教育旅行の誘致を行うこととなりました。

8. 課題と展望

「高速道路の開通をインパクトとして、地域を活性化したい」と結成した未来塾は、庄原市や広島県からの支援もあり、地域づくりに大きな成果を上げることができました。

また、一連の活動を通じて、未来塾のメンバーが考え、工夫し、実践することで、スキルアップと人材育成も進みました。

当初は、具体的に何をすればよいか、悩んだ時期もありましたが、道の駅の整備計画を発端として、魅力的な道の駅を議論し、道の駅に賑わいを生み出すための特産品開発を主導し、道の駅を玄関口として地域を訪れてもらうための着地型観光を進めるという一連の活動は、予想以上に順調に進めることができました。

未来塾はこれからも地域と連携しながら、特産品の開発や着地型観光を推進するとともに、地域課題に対応する新たなプロジェクトを企画し、それを実践に繋げる活動を予定しています。

人口減少、高齢化、過疎化、雪が降ること・・・すべてを受け止めて「こんな田舎にこんな楽しい生活が」と、うらやましがられる地域を創り上げたいと思っています。